参考資料

鈴鹿市人口ビジョン（案）

平成２７年１２月

鈴　鹿　市

目　　次

Ⅰ　はじめに ・・・

Ⅰ　はじめに

１　策定の背景

○ まち・ひと・しごと創生法（平成２６年法律第１３６号）制定

＜目　的＞

国民一人一人が夢や希望を持ち，潤いのある豊かな生活を安心して営むことができる地域社会を形成すること，地域社会を担う個性豊かで多様な人材について，確保を図ること及び地域における魅力ある多様な就業の機会を創出することの一体的な推進を図る。

○ 法に基づき，次の２点が閣議決定（平成２６年１２月２７日）

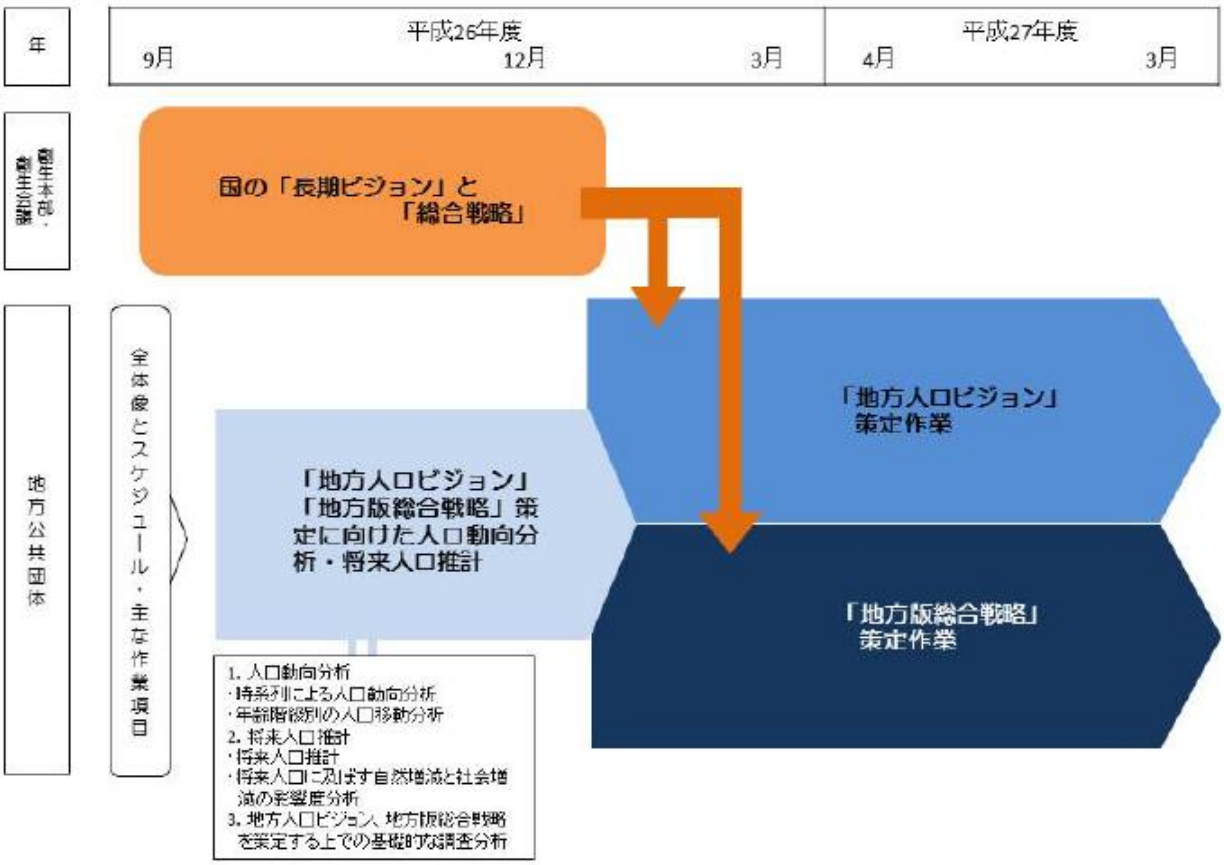
・人口の現状と将来展望を提示する「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」

・今後５年間の政府の施策の方向を提示する「まち・ひと・しごと創生総合戦略」

○ 地方公共団体は，国の長期ビジョン及び総合戦略を勘案し，次の２点の策定に努める。

・地方公共団体における人口の現状と将来展望を提示する「地方人口ビジョン」

・地域の実情に応じた今後５年間の施策の方向を提示する「市町村まち・ひと・しごと創生総合戦略（地方版 総合戦略）」※まち・ひと・しごと創生法第１０条



出典：内閣官房まち・ひと・しごと創生本部事務局提供資料（平成２６年１０月２０日）

２　人口ビジョンの位置付けと対象期間

（1）位置付け

○ 鈴鹿市における人口の将来を分析し，人口に関する地域住民の認識を共有し，今後目指すべき将来の方向と人口の将来展望を提示

○ 人口ビジョンは，本市の長期人口フレームを示すものであり，まち・ひと・しごと創生の実現に向けて効果的な施策を企画立案する上での重要な基礎資料

（2）対象期間

○ 国の長期ビジョンの期間（２０６０（平成７２）年）が基本となることから，本市でも同年までの将来人口推計を行うが，中期的（２０４０（平成５２）年）な将来人口推計に重点を置く。

Ⅱ　鈴鹿市における人口の現状分析

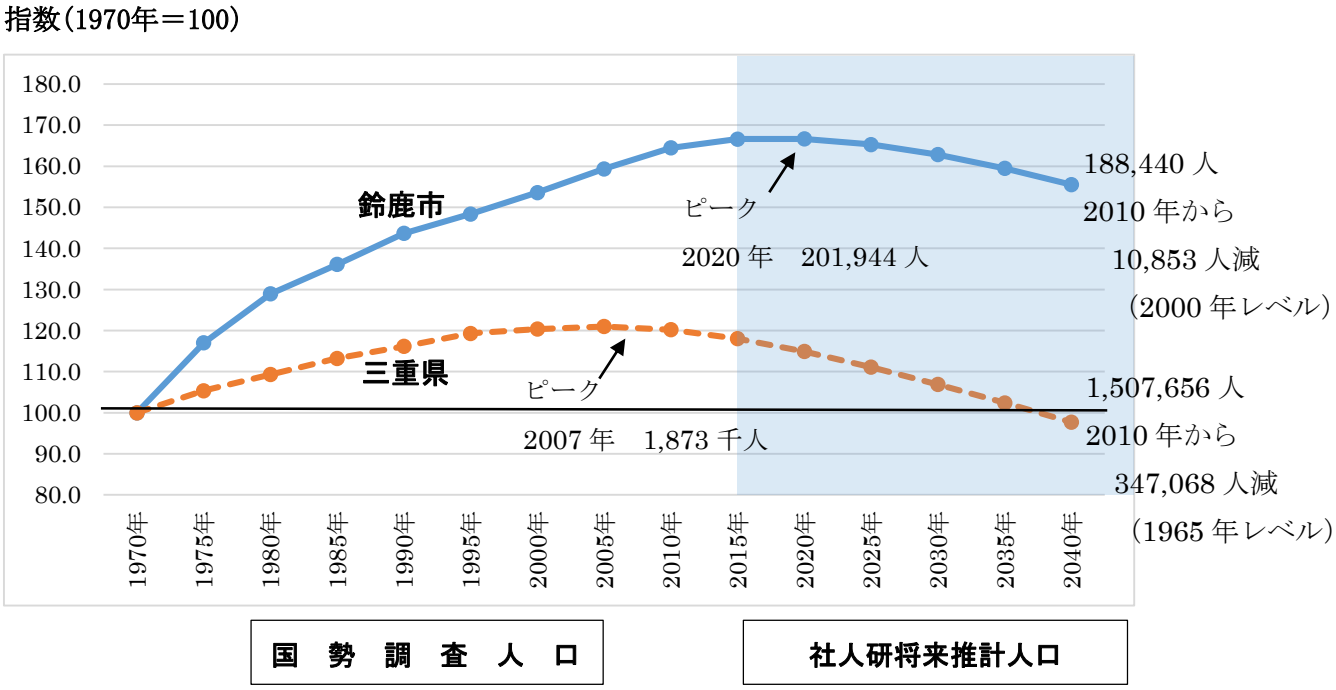
１　鈴鹿市の人口動向分析

（１）総人口の推移と将来推計

○ 鈴鹿市における１９７０年から２０１０年までの総人口の推移と，国立社会保障・人口問題研究所（以下「社人研」という。）による２０１５年から２０４０年までの将来推計を見たのが次のグラフです。

【図表　１－１】

鈴鹿市及び三重県の５年ごとの人口及び将来推計人口の推移



※２０１０年までは国勢調査，２０１５年以降の総人口は社人研推計値から作成

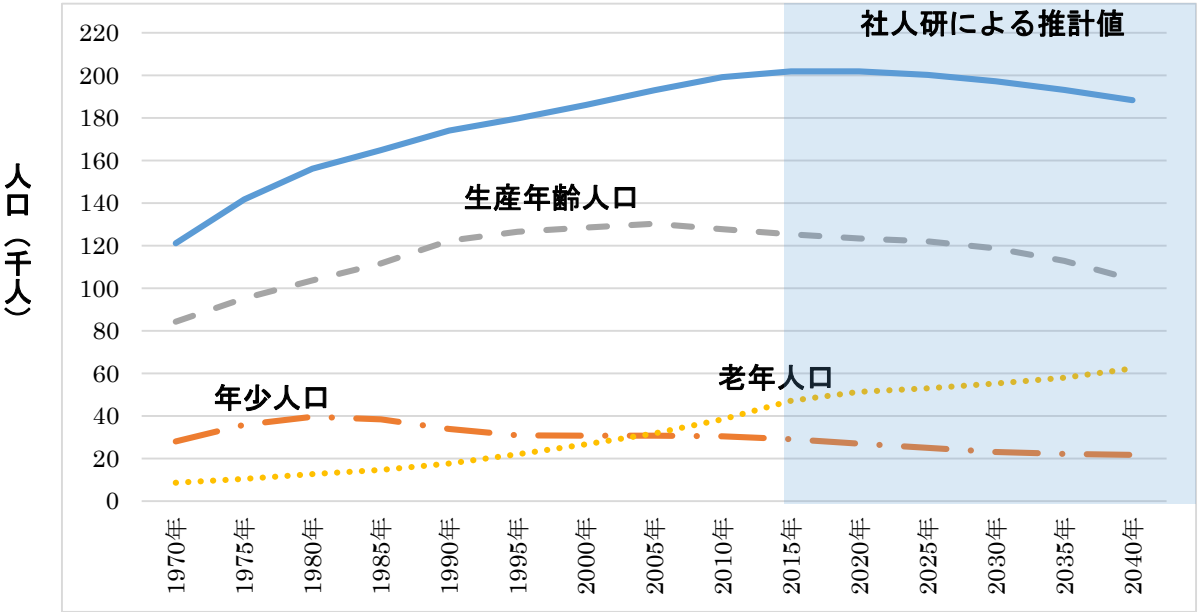
- 鈴鹿市の人口は三重県よりもピークを迎えるのは遅く，その後，減少に転じている。人口の増加率は三重県よりも高い。
- 社人研の推計によると，２０４０年には鈴鹿市は２０００年レベル，三重県は１９６５年レベルに戻ることになる。

（２）年齢別人口の推移と将来推計

○ 鈴鹿市における１９７０年から２０１０年までの人口及び２０１５年から２０４０年までの将来推計人口の推移について，年少人口（０～１４歳），生産年齢人口（１５～６４歳），老年人口（６５歳以上）の３区分で見たのが次のグラフです。

【図表　１－２】

年齢３区分別人口の推移（鈴鹿市）



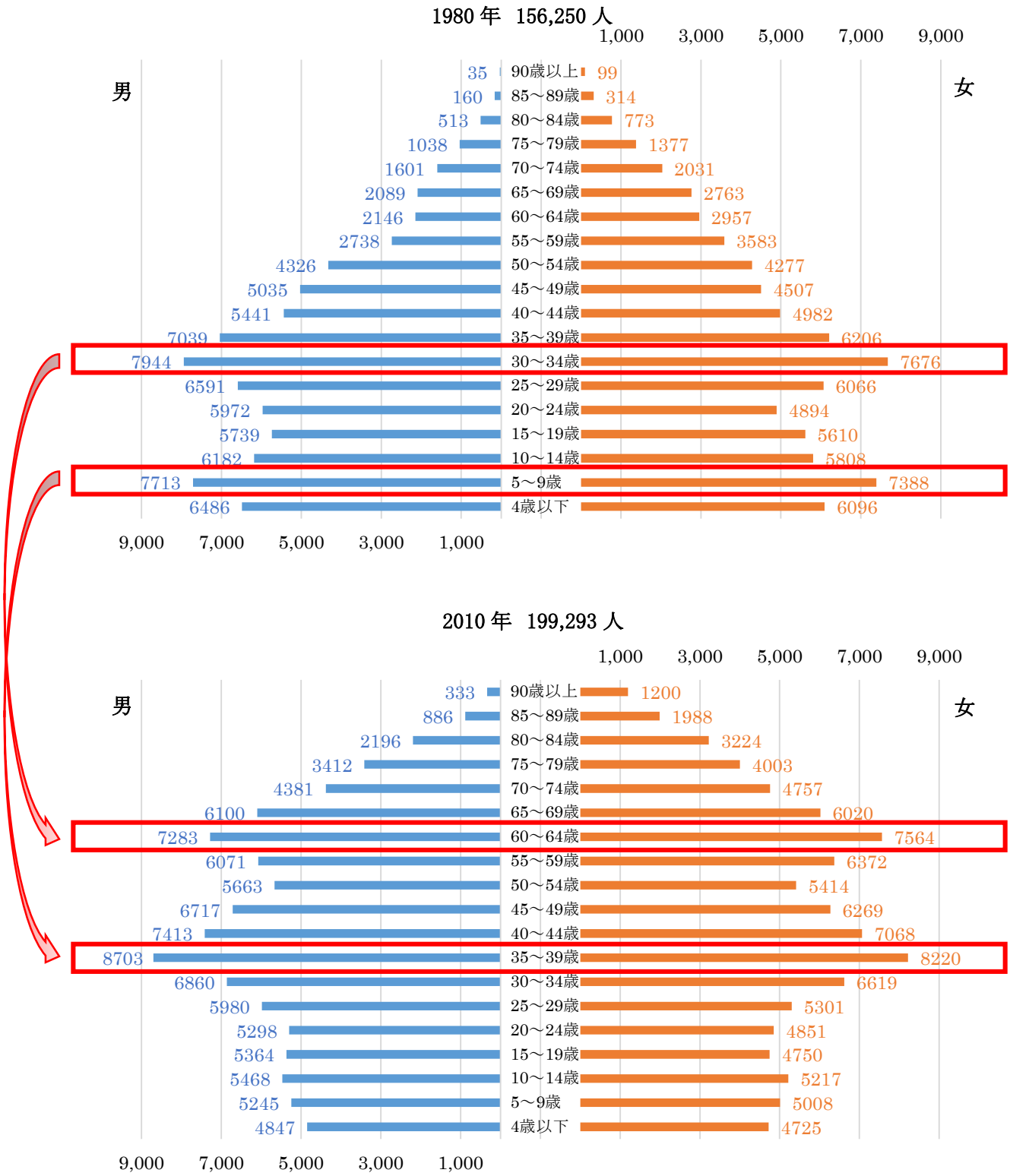
※２０１０年までの３区分人口は国勢調査，２０１５年以降の総人口は社人研推計値から作成

- 鈴鹿市では，生産年齢人口が戦後から２０００年代半ばまで増加を続けたが，２０１０年に減少に転じ，現在まで減少が続いている。
- 年少人口は，第２次ベビーブーム時には増加したが，その時期以外は減少傾向が続いている。
- 老年人口は，一貫して増加を続けており，２０００年代半ばには年少人口を上回った。

（３）人口構造の人口ピラミッドによる比較

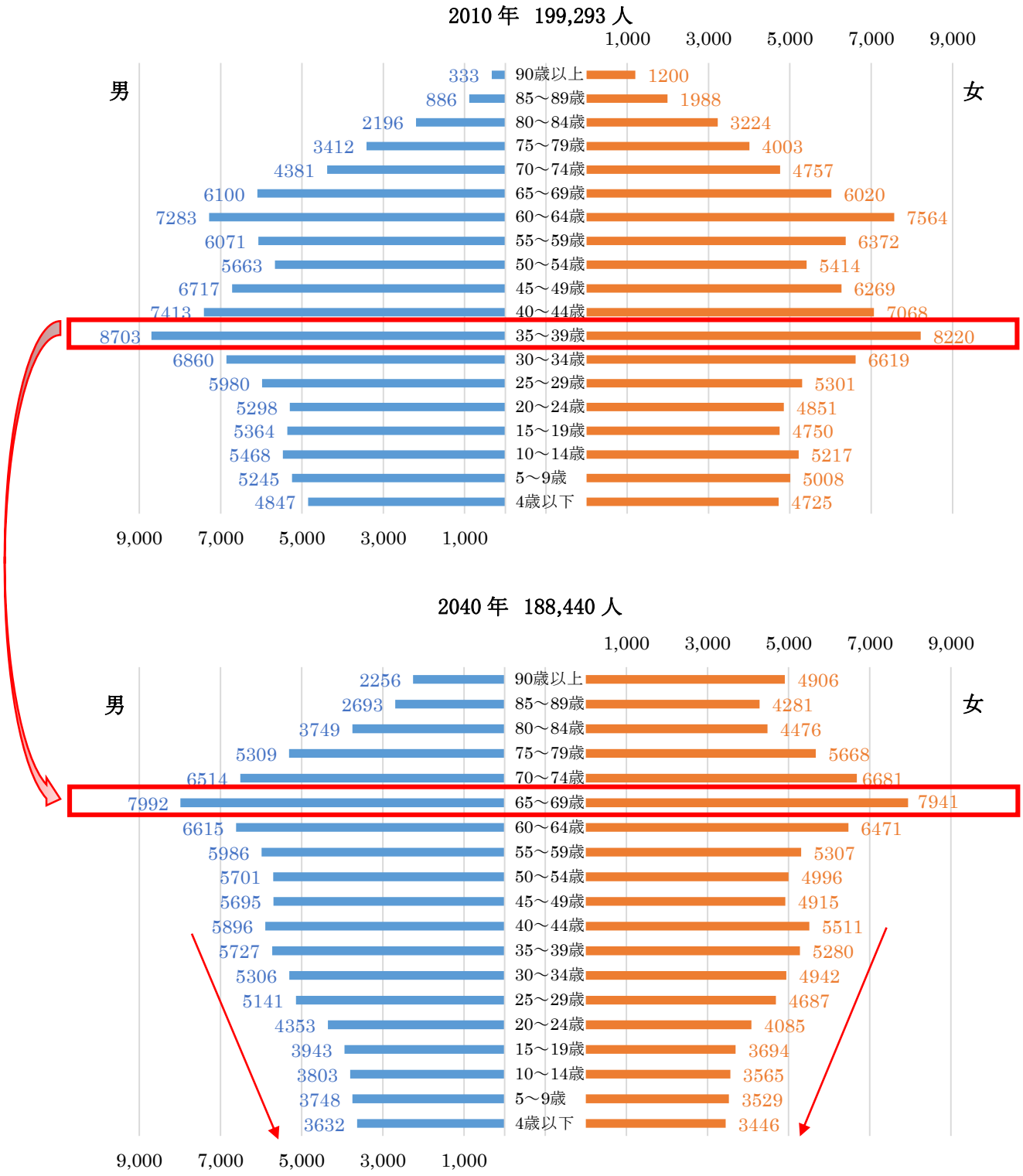
○ 鈴鹿市の２０１０年の人口と３０年前の１９８０年人口，及び，３０年後の２０４０年の将来推計人口について，人口ピラミッドで比較したのが次の図です。

【図表　１－３】　　１９８０年及び２０１０年の人口ピラミッド比較（鈴鹿市）



※１９８０年及び２０１０年は国勢調査から作成

【図表　１－４】　　２０１０年及び２０４０年の人口ピラミッド比較（鈴鹿市）



※２０１０年は国勢調査，２０４０年は社人研推計値から作成

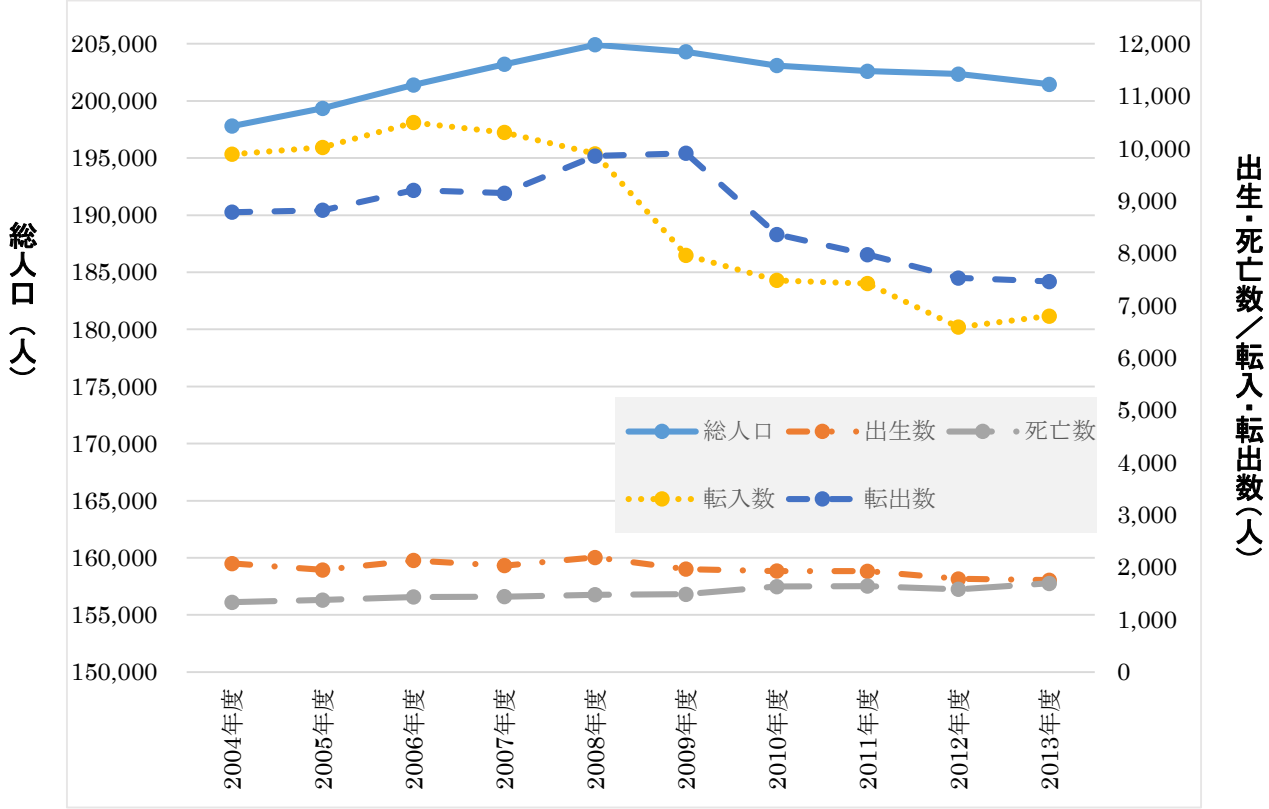
- １９８０年以降，出生数の減少傾向から人口ピラミッドが下すぼみの壺型に向かってきた。
- ２０１０年の団塊ジュニア（３５-３９歳）が２０４０年には６５歳以上になり，高齢化率が大きく上昇する。
- ２０４０年の４０-４４歳以下は年齢が低下するごとに減少しているが，推計に基づく部分であり，将来の出生率により変化する。

（4）出生・死亡，転入・転出の推移

○ 鈴鹿市における２００４年度から２０１３年度の出生・死亡数及び転入・転出数の推移を見たのが次のグラフです。

【図表　１－５】

出生・死亡数，転入・転出数の推移（鈴鹿市）



※住民基本台帳データから作成

※総人口は各年度９月末時点

（総人口とは行政区域内人口のことであり，平成２４年７月９日の住民基本台帳制度の一部改正により，外国人住民も住民基本台帳制度の対象）

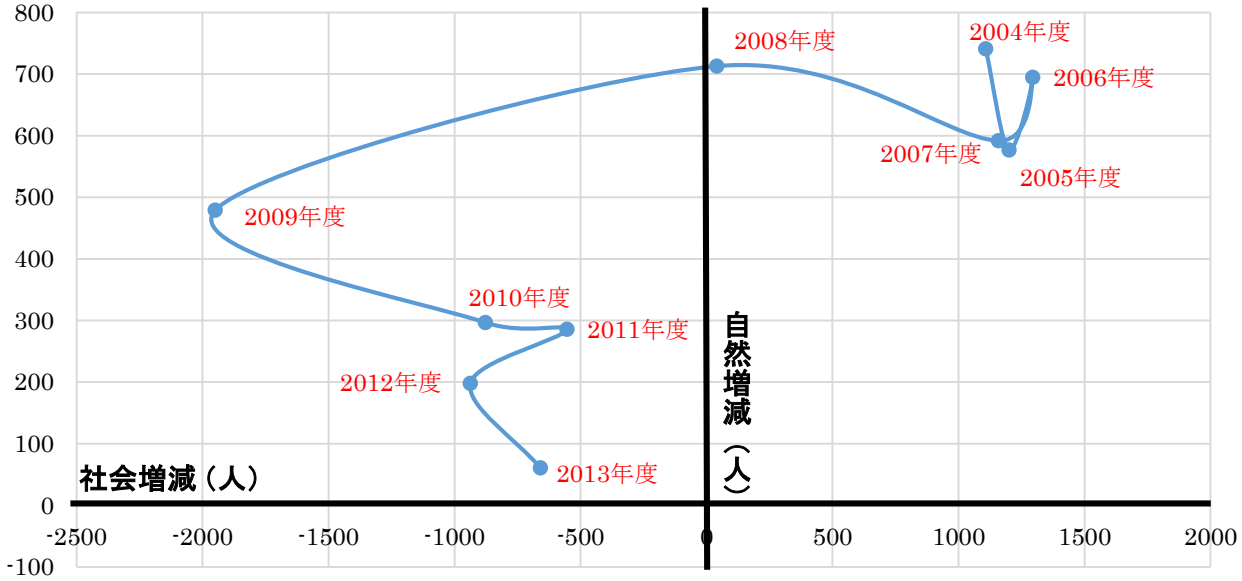
- 鈴鹿市では，「自然増減」については，出生数が死亡数を上回る「自然増」であるが年々，その差は縮小している。
- 「社会増減」については，２００８年度まで転入が転出を上回る転入超過（「社会増」）であったが，２００９年度からは転出が転入を転出超過（「社会減」）が続いている。
- 外国人人口は，２００８（平成２０）年１０月末の１０，４９１人をピークに減少傾向にあり，２００９年度における外国人の転出超過数は約１，４００人に上っている。それ以降，数は減少したものの，依然として転出超過の状態が続いている。

（５）総人口の推移に与えてきた自然増減と社会増減の影響

○ 自然増減と社会増減が総人口の推移に与えてきた影響を見たのが次の図で，横軸が社会増減の影響，縦軸が自然増減の影響となります。

【図表　１－６】

総人口に与えてきた自然増減と社会増減の影響（鈴鹿市）



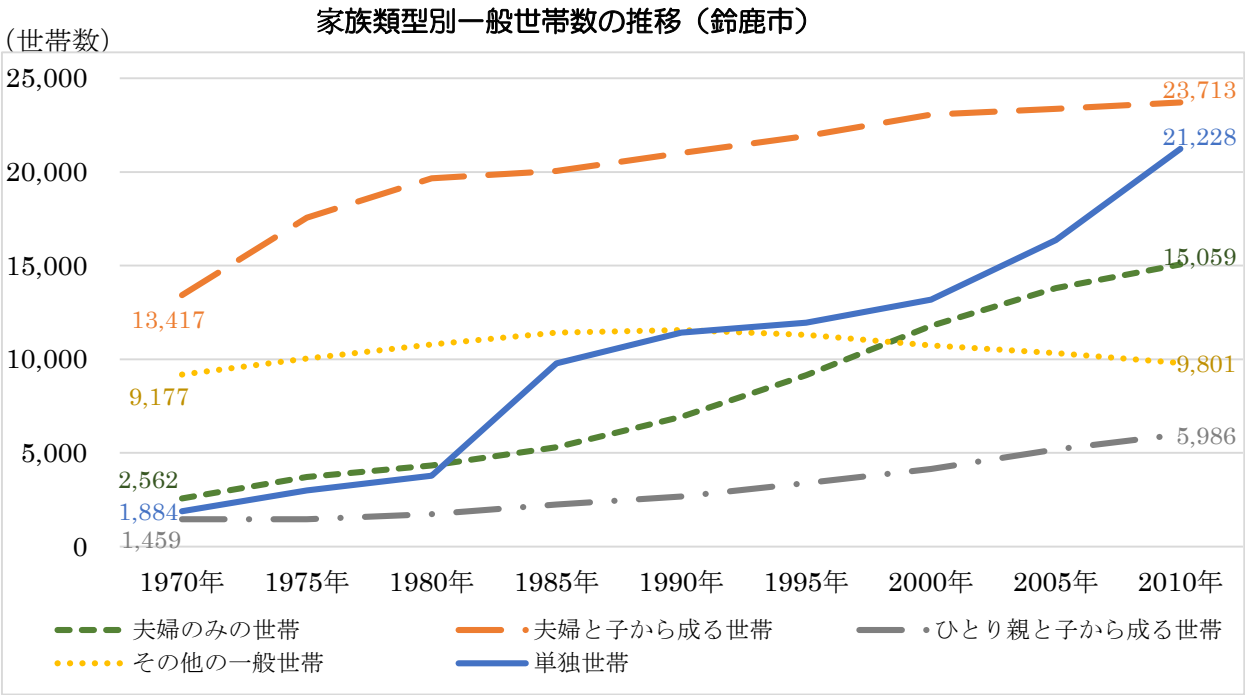
※住民基本台帳データから作成

- 鈴鹿市では，２００８年度までは自然増減，社会増減ともに「増加」の状況であったものの，リーマンショックの影響もあり２００９年度以降，「社会減」に転じた。
- ２００８年度以降，「自然増」であるものの，その増加幅は減少を続けている。

（６）家族類型別世帯数の推移

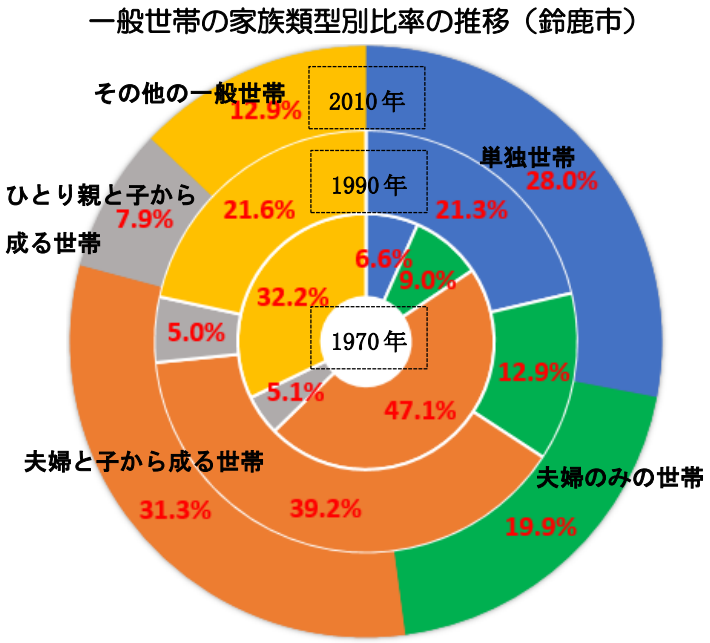
○ 鈴鹿市における１９７０年から２０１０年までの家族類型別の世帯数の推移を見たのが，【図表１－７】のグラフで，その比率の推移を見たのが【図表１－８】のグラフです。

【図表　１－７】



※各世帯数は国勢調査から作成

【図表　１－８】



※各世帯数は国勢調査から作成

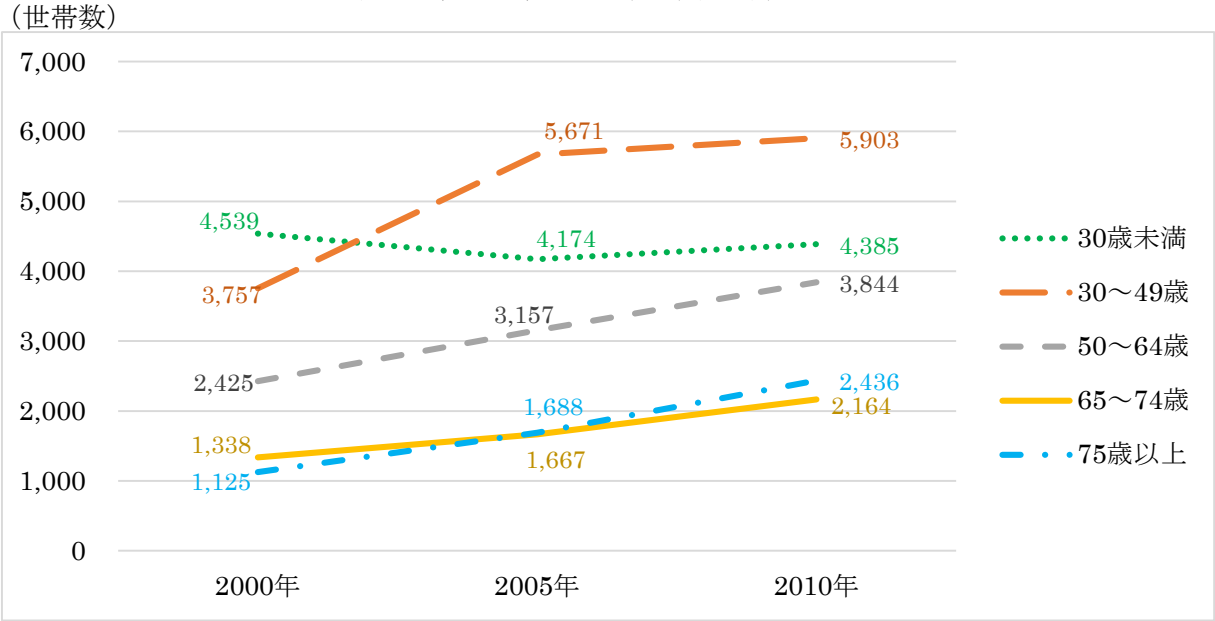
- 夫婦と子から成る世帯の全体に占める割合が減少に転じる中，単独世帯は，１９７０年では６．６％であったが，２０１０年には２８％と大きく増加している。
- また，夫婦のみの世帯も全体に占める割合が増加傾向にある。

（7）年齢別単独世帯数の推移

○ 鈴鹿市における２０００年から２０１０年までの単独世帯数の推移について，年齢別に見たのが次のグラフです。

【図表　１－９】

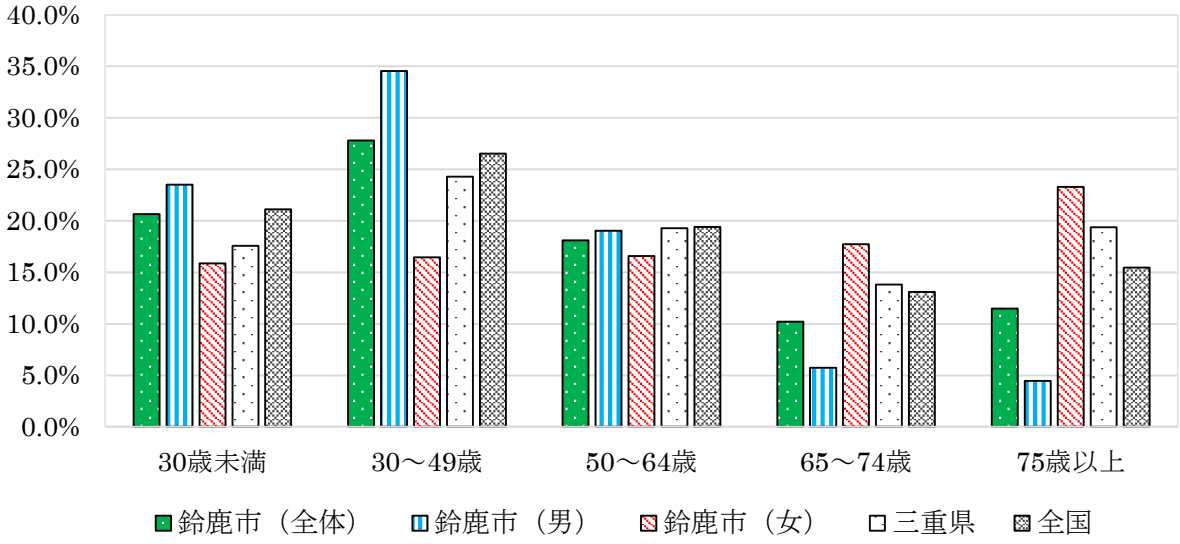
年齢別単独世帯数の推移（鈴鹿市）



※世帯数は国勢調査から作成

【図表　１－１０】

２０１０年　単独世帯総数に占める年齢別比率の比較（全国・三重県・鈴鹿市）



※世帯数は国勢調査から作成

※単独世帯総数には年齢不詳分を含むため，年齢別比率の合計は１００％にならない。

- ３０歳以上の単独世帯は，いずれの年代も増加傾向にある。
- ２０１０年においては，男性では５０歳以下の年代で，女性では６５歳以上の年代で単独世帯総数に占める割合が高い傾向にある。

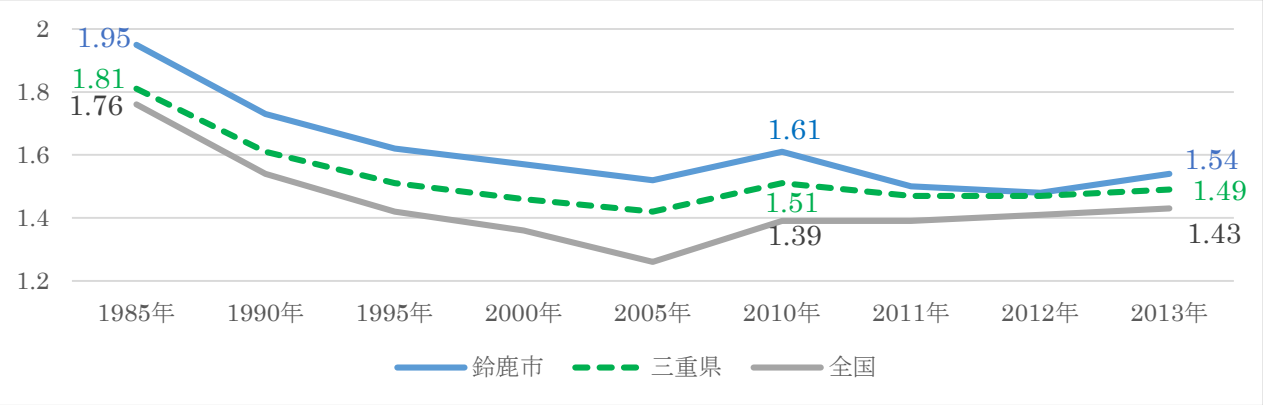
２　人口の自然増減に関する要因分析

（１）合計特殊出生率の推移

○ １９８５年から２０１３年までの合計特殊出生率の推移について，全国・三重県・鈴鹿市の推移を見たのが【図表２－１】のグラフです。
また，全国・全都道府県・鈴鹿市の２０１３年の合計特殊出生率について率が高い順に並べたのが【図表２－２】のグラフです。

【図表　２－１】

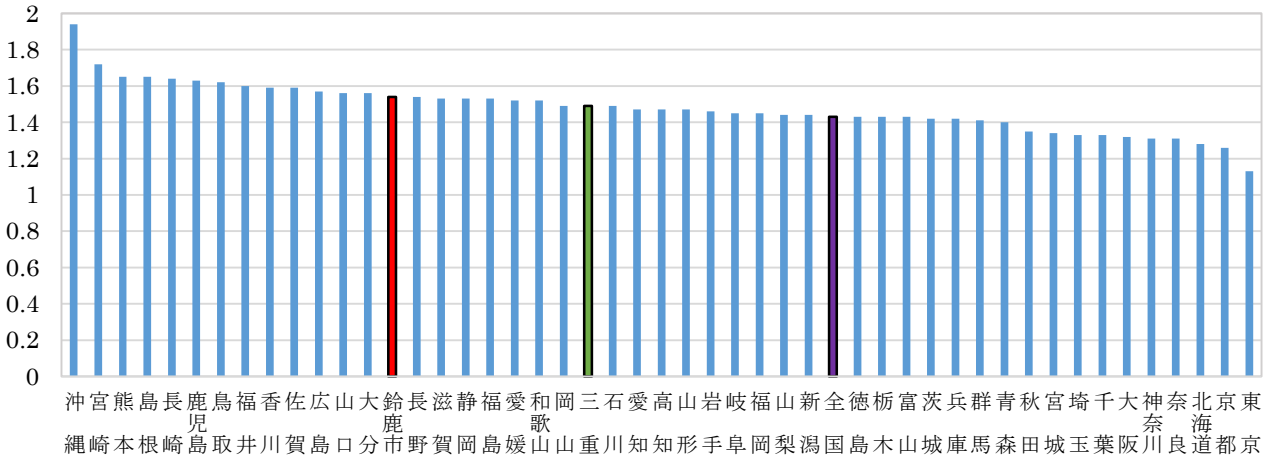
合計特殊出生率の推移（全国・三重県・鈴鹿市）



※全国の合計特殊出生率は，厚生労働省「人口動態統計」から作成
※三重県・鈴鹿市の合計特殊出生率は，国勢調査の各年（１９８５，１９９０，１９９５，２０００，２００５，２０１０）を中心とした５年間のデータをもとに小地域における推定に有力な手法であるベイズ推定を用いている。
なお，２０１１年以降の合計特殊出生率は，三重県鈴鹿保健所「保健所年報」から作成

【図表　２－２】

２０１３年　合計特殊出生率（全国・全都道府県・鈴鹿市）



※全国の合計特殊出生率は，厚生労働省「人口動態統計」から作成
※三重県・鈴鹿市の合計特殊出生率は，三重県鈴鹿保健所「保健所年報」から作成

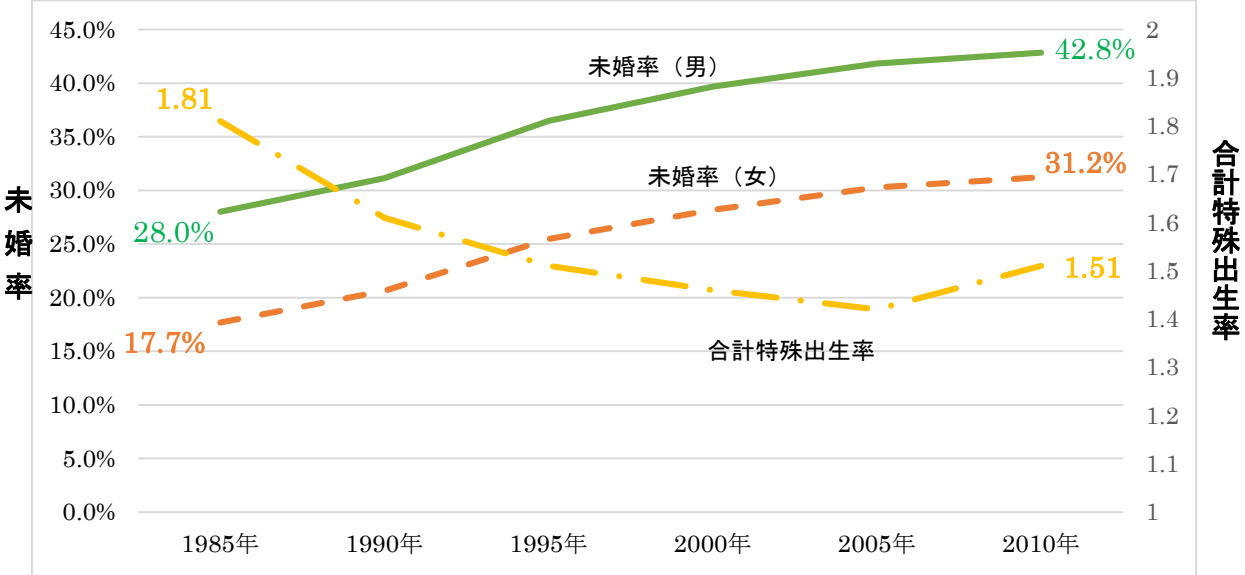
- 全国的に合計特殊出生率は１９６５年から低下を続けてきたが，２００５年を底に上昇に転じている。
- 鈴鹿市では全国を上回って推移しており，２０１３年は１．５４で三重県平均より０．０５ポイント高く，都道府県別で見ると全国１４位。

（2）合計特殊出生率と未婚率の推移

○ １９８５年から２０１０年までの三重県及び鈴鹿市の合計特殊出生率，２０～４９歳男女の未婚率の推移を見たのが次のグラフです。

【図表　２－３】

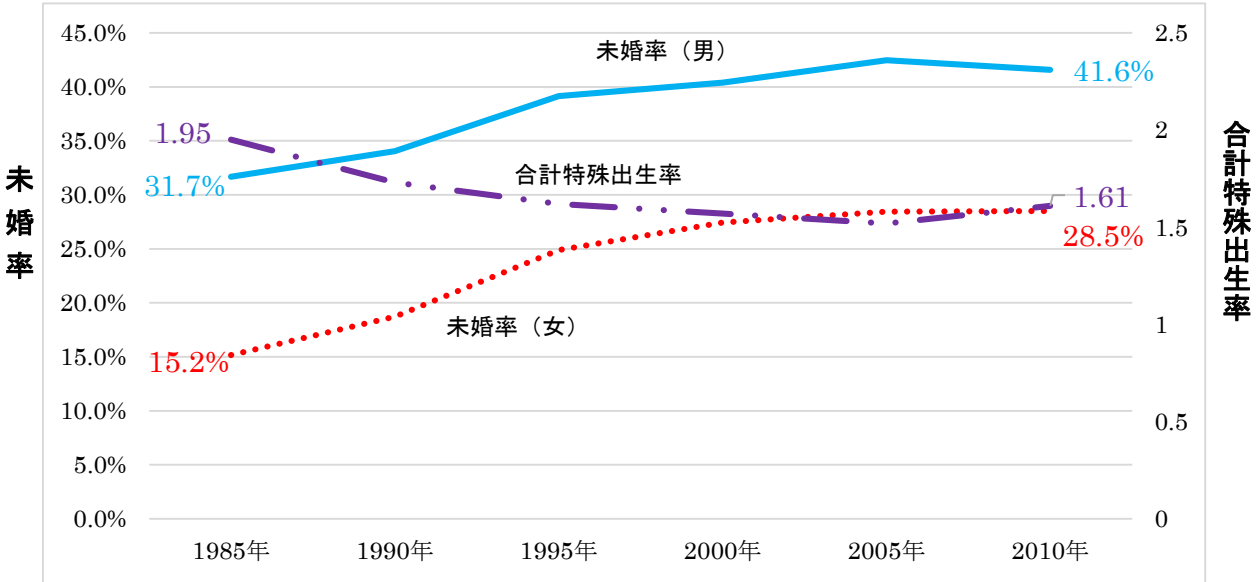
合計特殊出生率と未婚率（２０-４９歳）の推移（三重県）



※未婚率は国勢調査から作成

【図表　２－４】

合計特殊出生率と未婚率（２０-４９歳）の推移（鈴鹿市）



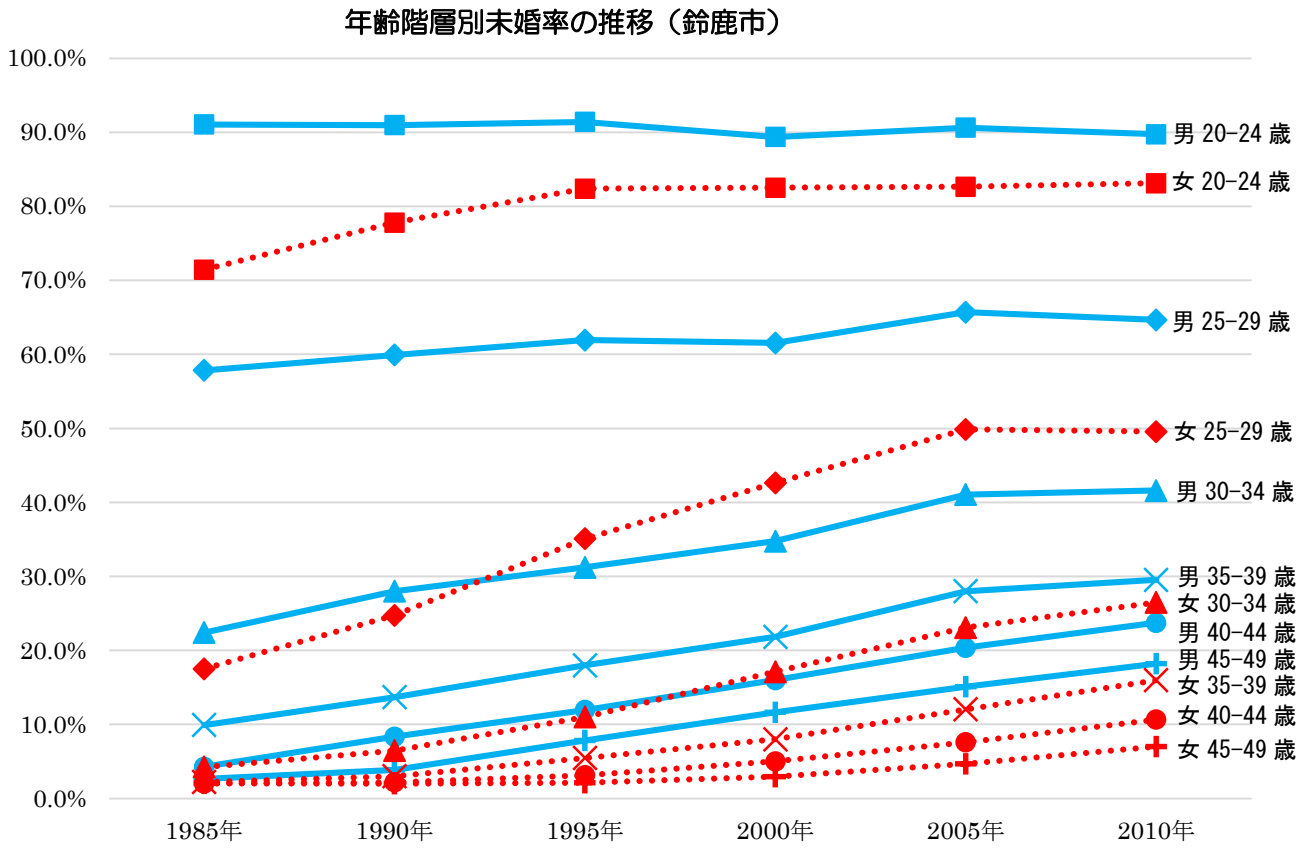
※未婚率は国勢調査から作成

- 未婚率について，三重県・鈴鹿市，男女ともに上昇傾向している。
- 特に，男性の未婚率は高く，２０１０年には，２０-４９歳の年齢では三重県では４２．８%，鈴鹿市では４１．６%といずれも４０%を超え，５人に２人は未婚の状況にある。

（３）性別・年齢階層別未婚率の推移

○ １９８５年から２０１０年までの国勢調査による男女別，年齢階層別の未婚率の推移を見たのが次のグラフです。

【図表　２－５】



※未婚率は国勢調査から作成

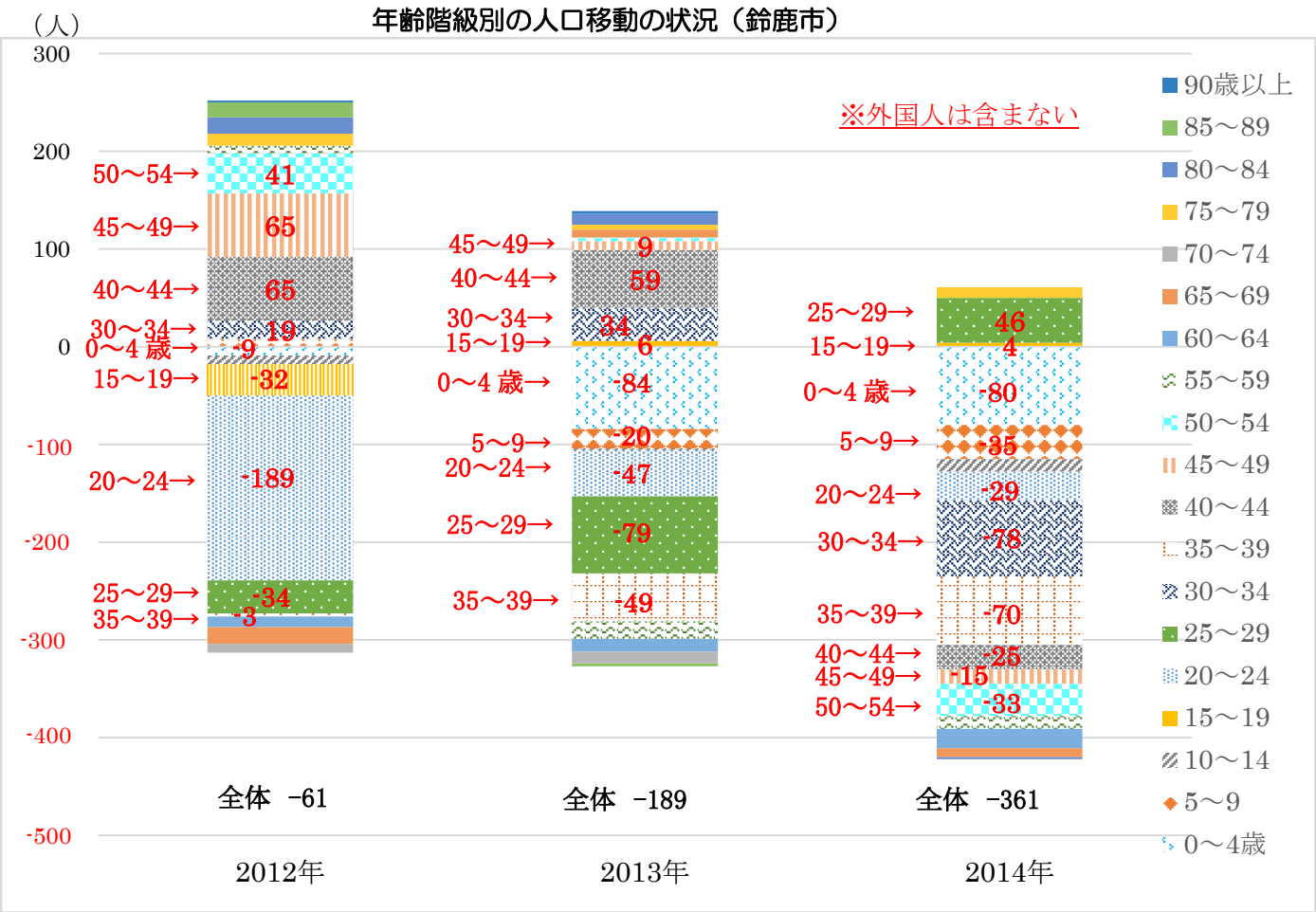
- 未婚率は１９８５年以降，２５～２９歳及び３０～３４歳の女性，３０～３４歳及び３５～３９歳の男性で急激な上昇が始まっている。
- 特に２５～２９歳の女性で見てみると，１９８５年には１７．５%だったものが２０１０年には４９．６%と３０%弱伸ばしている。

３　人口の社会増減に関する要因分析

（１）最近の年齢階級別の人口移動状況

○ ２０１２年から２０１４年までの人口移動について，年齢階級別に見たのが次のグラフです。原点（０）から上が転入超過，下が転出超過となっています。

【図表　３－１】



※「住民基本台帳人口移動報告」（総務省統計局）から作成

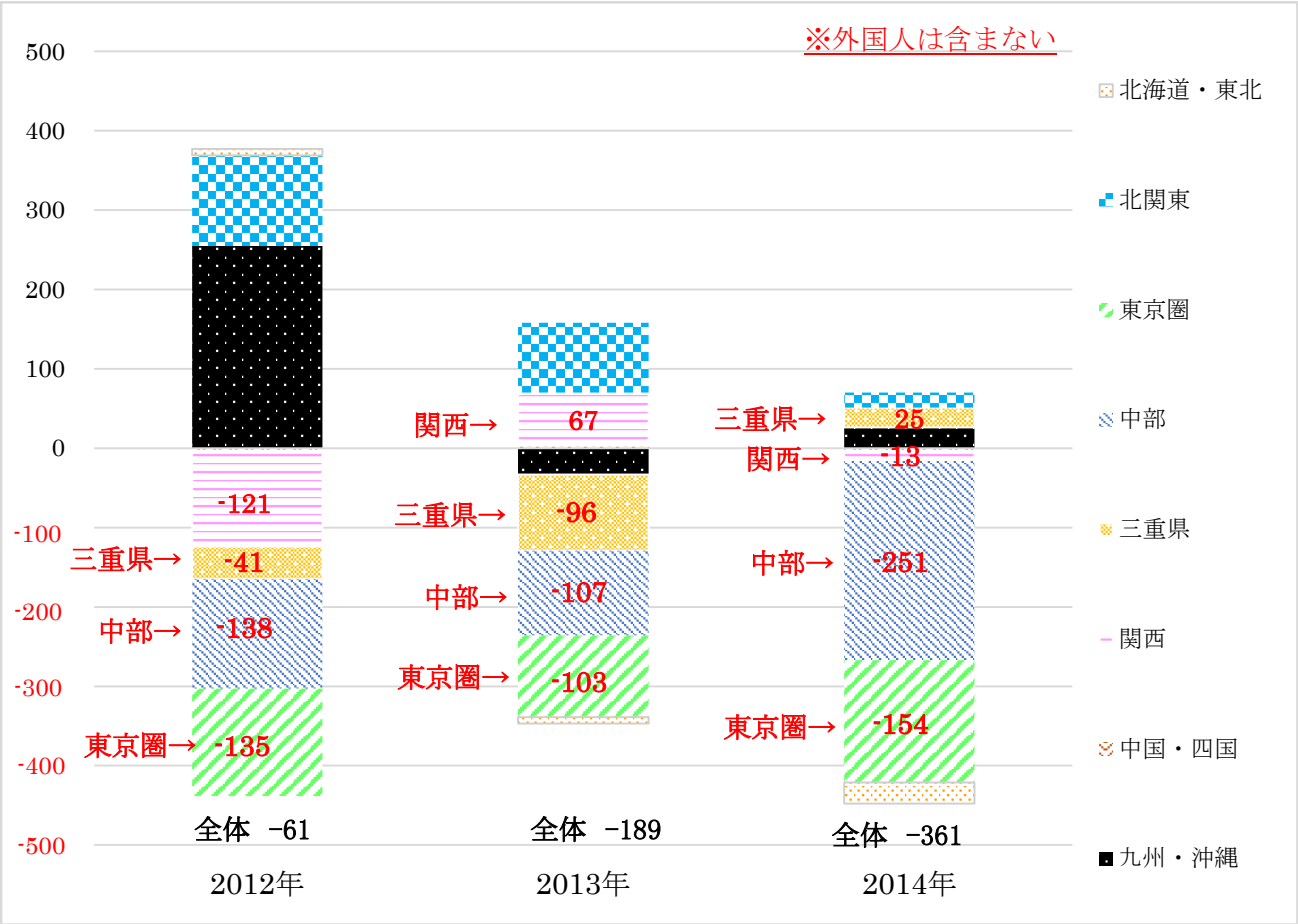
- 鈴鹿市では，２００９年度以降，転出超過（「社会減」）傾向となっており，年々，転出超過数が大きくなっている。
- 年によって差は見られるが，１５～３９歳の世代では転出超過の傾向があり大学等への進学時や就職時の転出が背景にあると考えられる。また，２０１４年には４０代・５０代の世代の転出超過が現れている。
- ０～９歳の転出超過も大きく，若い世代の夫婦の転出に伴うものであると考えられる。

（２）最近の地域ブロック別の人口移動状況

○ ２０１２年から２０１４年までの人口移動について，地域ブロック別に見たのが次のグラフです。原点（０）から上が転入超過，下が転出超過となっています。

【図表　３－２】

地域ブロック別の人口移動の状況（鈴鹿市）



※「住民基本台帳人口移動報告」（総務省統計局）から作成

■地域ブロックの区分は下記のとおり。

北海道・東北：　北海道，青森，岩手，宮城，秋田，山形，福島

北関東：　茨城，栃木，群馬　　**東京圏**：　埼玉，千葉，東京，神奈川

中部：　新潟，富山，石川，福井，山梨，長野，岐阜，静岡，愛知

関西：　三重，滋賀，京都，大阪，兵庫，奈良，和歌山

中国：　鳥取，島根，岡山，広島，山口　　**四国**：　徳島，香川，愛媛，高知

九州・沖縄：　福岡，佐賀，長崎，熊本，大分，宮崎，鹿児島，沖縄

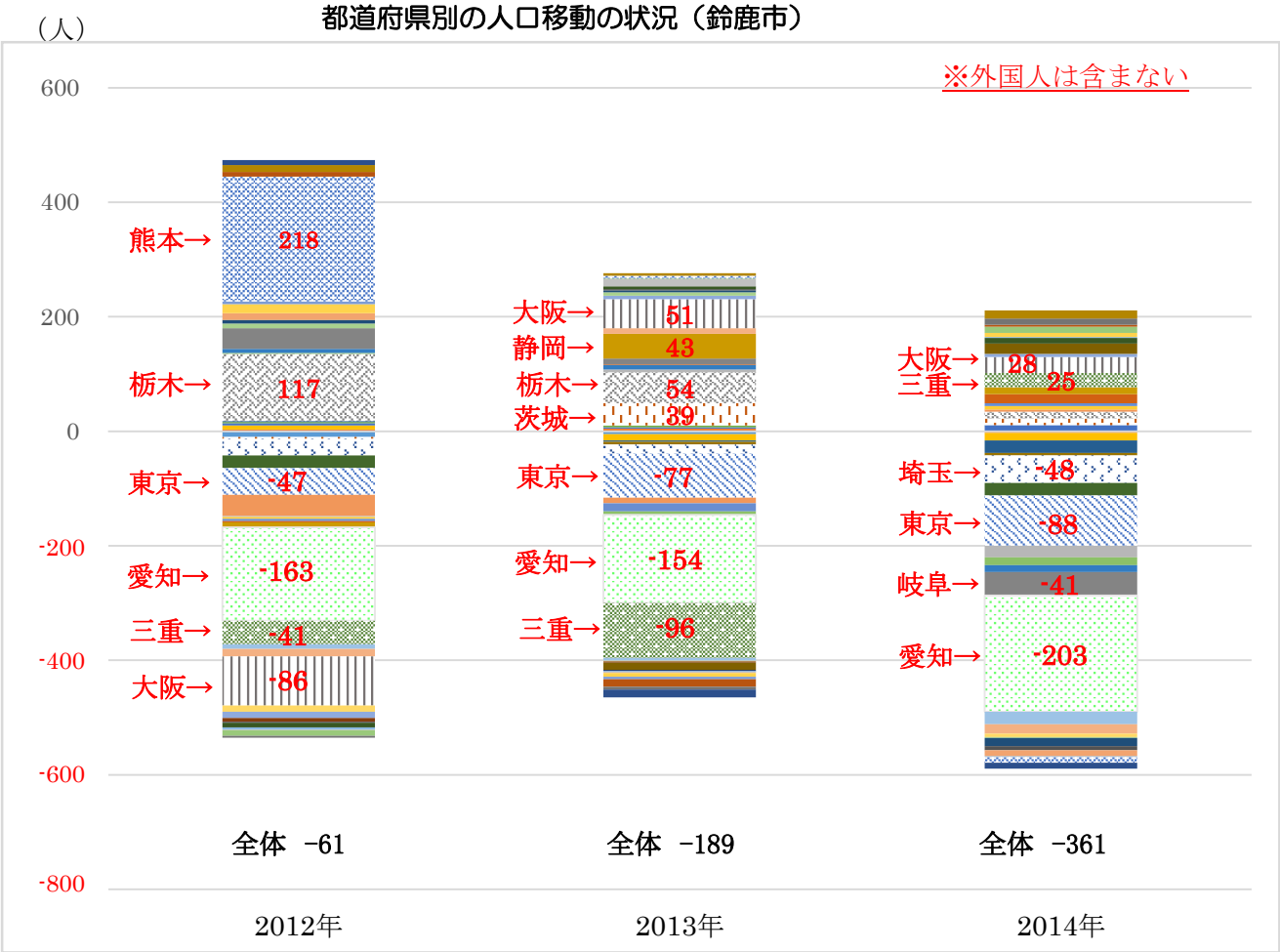
※上記グラフでは，関西ブロックから三重県を抜き出した上で集計をしている。

- 鈴鹿市からは，東京圏，中部圏に対して大きく転出超過となっている。
- ２０１２年に比べ，２０１３年には東京圏，中部圏に対しての転出超過は小さくなったが，２０１４年には一転し，転出超過数は拡大している。
- ２０１２年及び２０１３年には転出超過となっていた県内他市町への移動が，２０１４年には転入超過に転じた。

（３）最近の都道府県別の人口移動状況

○ ２０１２年から２０１４年までの人口移動について，都道府県別に見たのが次のグラフです。原点（０）から上が転入超過，下が転出超過となっています。

【図表　３－３】



※「住民基本台帳人口移動報告」（総務省統計局）から作成

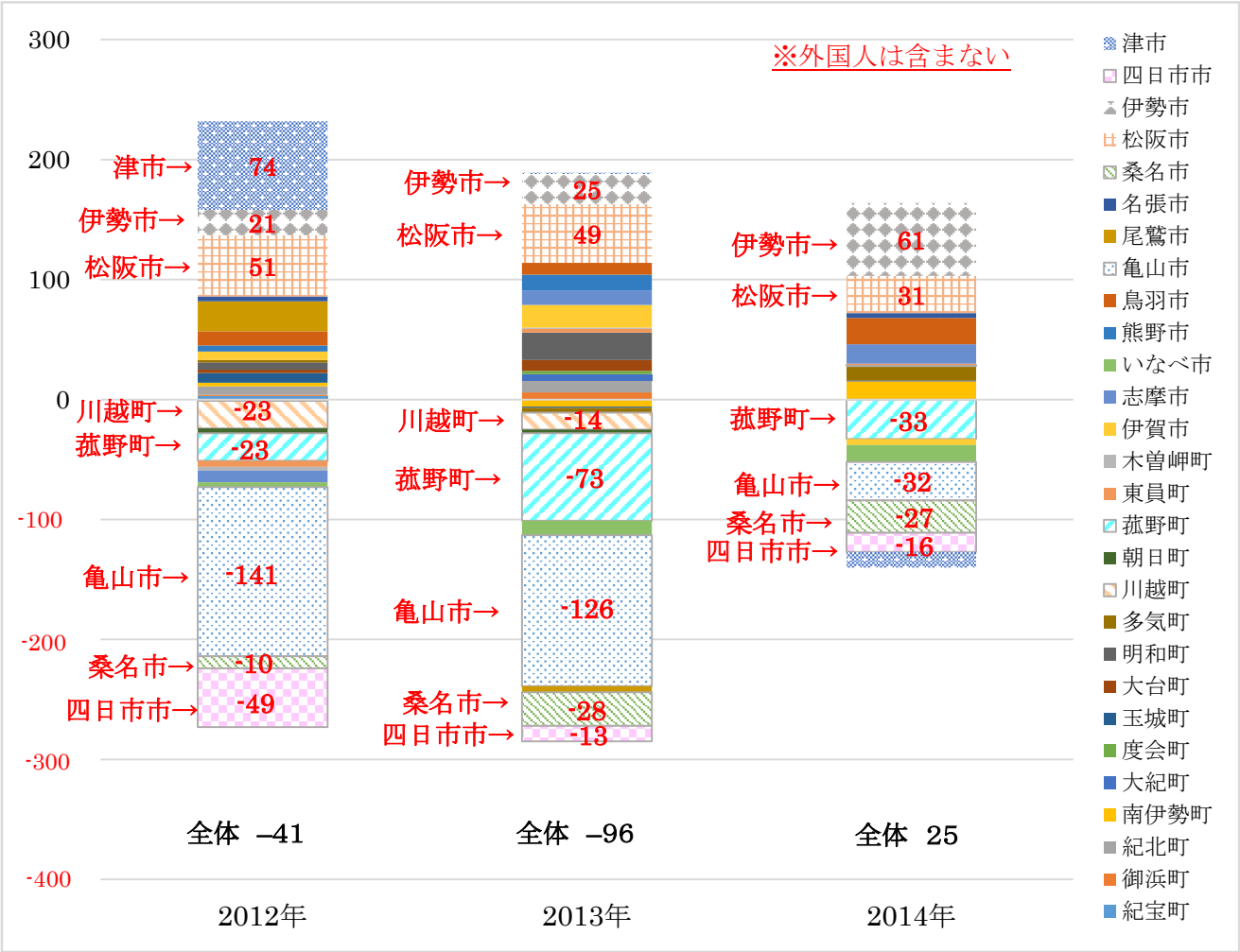
➢ ２０１２年から２０１４年の３ヵ年の傾向では，東京圏を代表する東京都，中部圏を代表する愛知県に対して転出超過となっている。

（４）最近の県内市町別の人口移動状況

○ ２０１２年から２０１４年までの人口移動について，県内市町別に見たのが次のグラフです。原点（０）から上が転入超過，下が転出超過となっています。

【図表　３－４】

県内市町別の人口移動の状況（鈴鹿市）



※「住民基本台帳人口移動報告」（総務省統計局）から作成

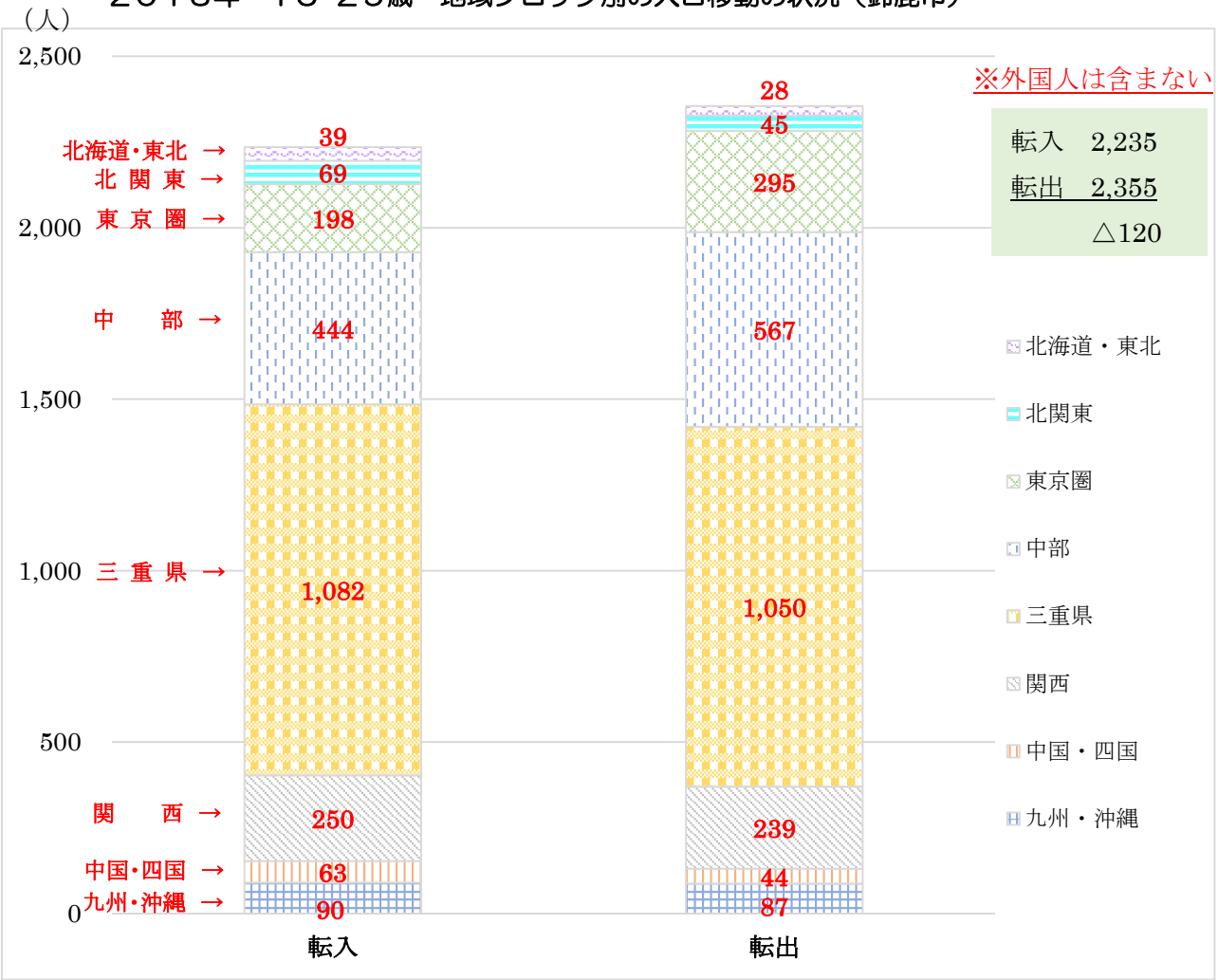
- ２０１２年及び２０１３年には転出超過であったが，２０１４年には転入超過に転じた。
- ２０１２年から２０１４年の３ヵ年の傾向では，転出超過にある市町は同じ傾向にあり，亀山市・菰野町への転出数の占める割合は高い傾向にある。

（５）特定年齢階級における地域ブロック別の人口移動状況

○ 特定の年齢階層（１５～２９歳）における２０１３年の人口移動について，地域ブロック別に見たのが次のグラフです。

【図表　３－５】

２０１３年　１５-２９歳・地域ブロック別の人口移動の状況（鈴鹿市）



※「住民基本台帳人口移動報告」（総務省統計局）から作成

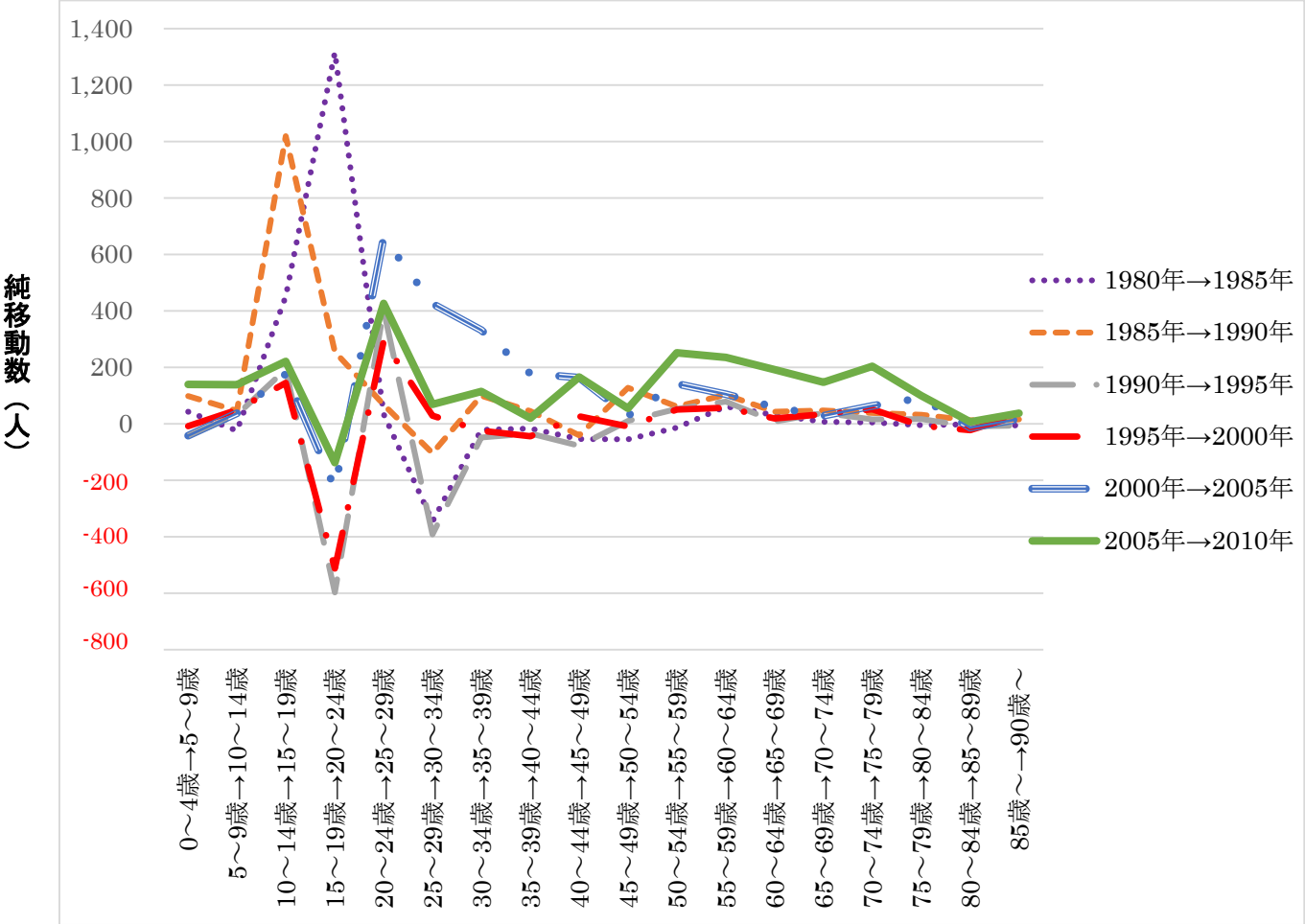
- １５～２９歳の若年層は，進学・就職等のライフステージにおけるタイミングで転出超過の傾向が強いが，２０１３年においては特に東京圏・中部圏でそれぞれ１００人程度の転出超過となっている。
- ２０１３年においては，東京圏・中部圏以外の地域では，転入超過（転出≒転入）の状態となっている。

（６）性別・年齢階級別に見た５年間の人口移動状況の長期的動向

○ １９８０年→１９８５年から最近年までの推移は次のグラフのとおりとなっています。

【図表　３－６】

年齢階級別５年間の人口移動の推移（鈴鹿市男性）

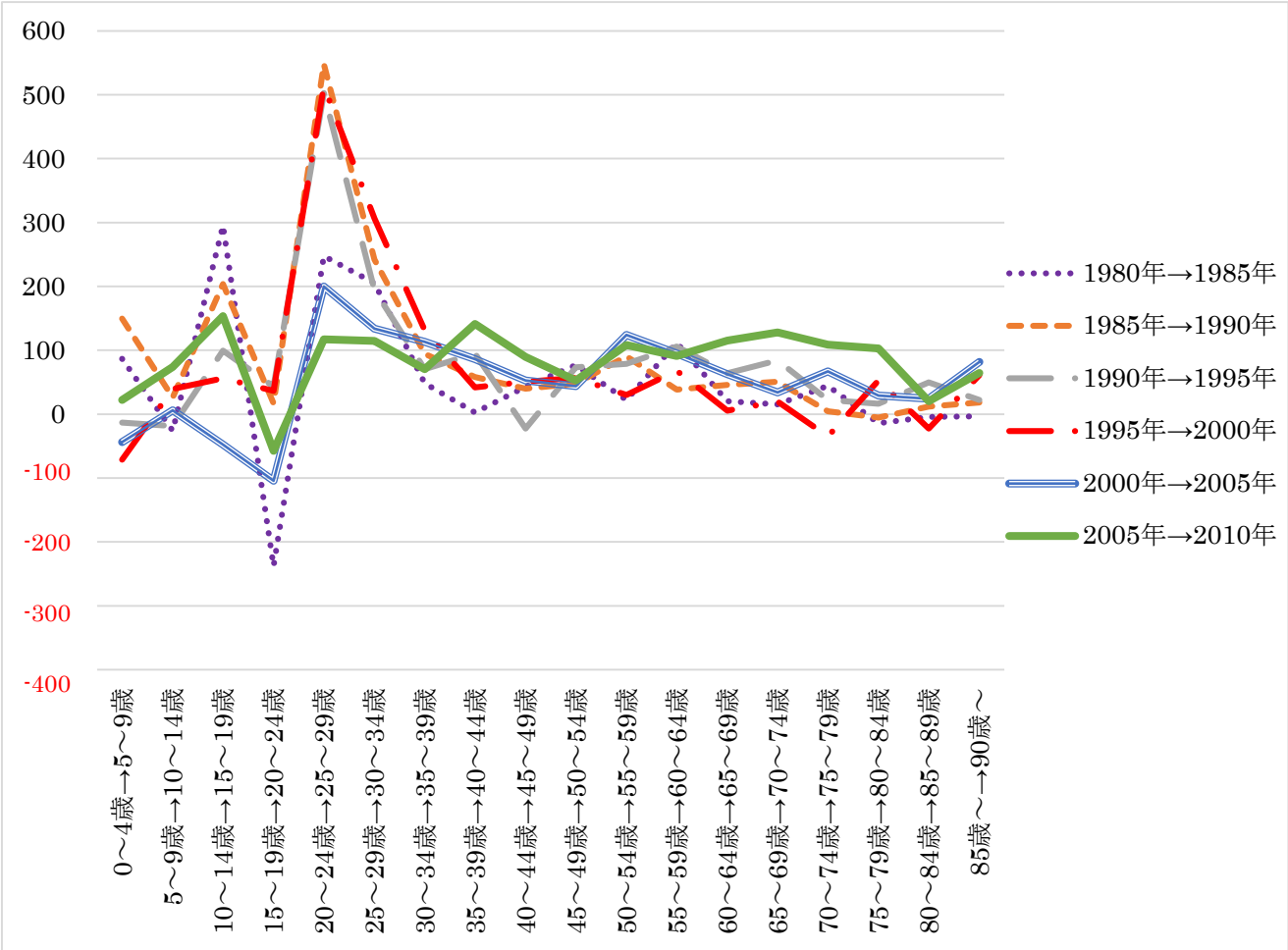


※総務省「国勢調査」データに基づく総務省による推計値

- １９９０年以前は，就職・進学の時期に当たる１０～１４歳→１５～１９歳及び１５～１９歳→２０～２４歳に大きく転入超過となっていた。
- １９９０年以降は，１５～１９歳→２０～２４歳に転出超過となっている一方，Uターンの時期である２０～２４歳→２５～２９歳の転入超過が大きい。
- また，２０００年以降は，５０歳以降の転入超過が増加している。

【図表　３－８】

年齢階級別５年間の人口移動の推移（鈴鹿市女性）



※総務省「国勢調査」データに基づく総務省による推計値

- １９９０年以降は，進学・就職の時期に当たる１５～１９歳→２０～２４歳に転出超過となっている。
- １９８５年以降，２０～２４歳→２５～２９歳に大きく転入超過となっていたが，２０００年以降，その傾向は小さくなっている。

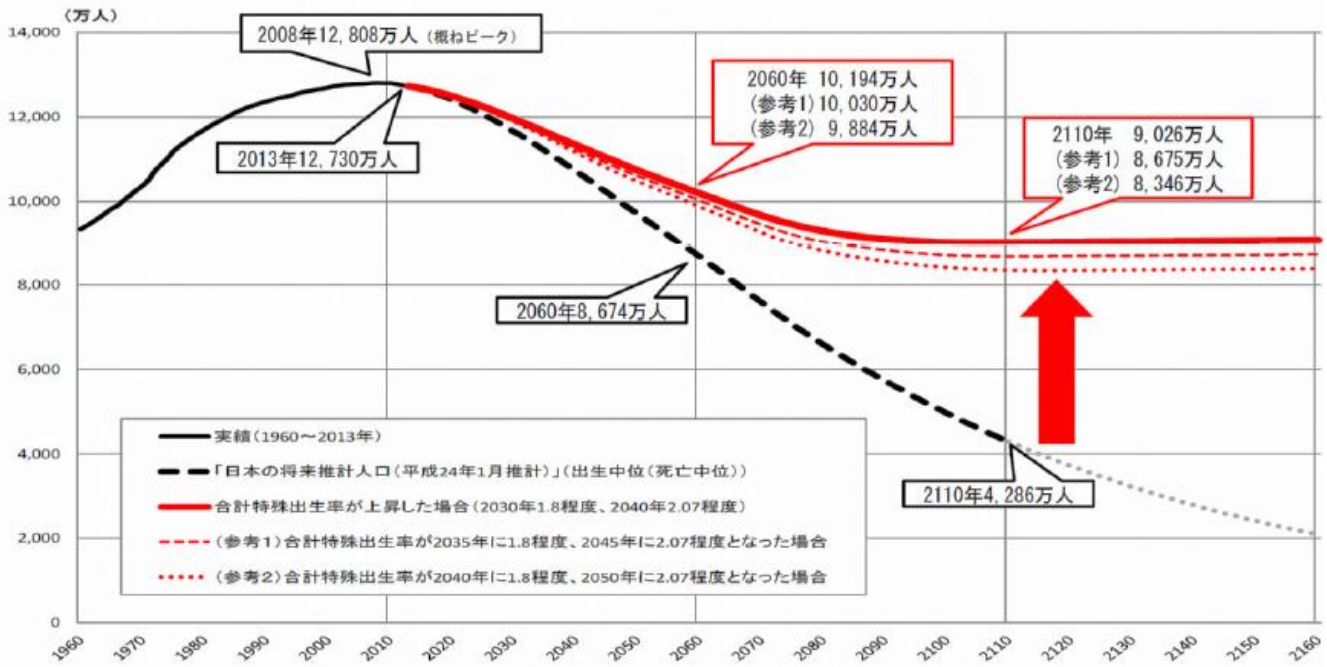
Ⅲ　人口の将来推計

１　国の人口推移と長期的な見通し

○ 社人研「日本の将来推計人口（平成２４年１月推計）」（出生中位（死亡中位））をもとに，国の人口推移と長期的な見通しについて示したのが次のグラフです。

【図表　１－１】

我が国の人口の推移と長期的な見通し



（注1）実績は、総務省統計局「国勢調査」等による（各年10月1日現在の人口）。国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」は出生中位（死亡中位）の仮定による。2110～2160年の点線は2110年までの仮定等をもとに、まち・ひと・しごと創生本部事務局において機械的に延長したものである。
（注2）「合計特殊出生率が上昇した場合」は、経済財政諮問会議専門調査会「選択する未来」委員会における人口の将来推計を参考にしながら、合計特殊出生率が2030年に1.8程度、2040年に2.07程度（2020年には1.6程度）となった場合について、まち・ひと・しごと創生本部事務局において推計を行ったものである。

- 社人研「日本の将来推計人口（平成２４年１月推計）」（出生中位（死亡中位））によると，２０６０年の総人口は約８，７００万人まで減少すると見通されている。
- 仮に，合計特殊出生率が２０３０年に１．８程度，２０４０年に２．０７程度（２０２０年には１．６程度）まで上昇すると，２０６０年の人口は約１億２００万人となり，長期的には９，０００万人程度でおおむね安定的に推移するものと推計される。
- なお，仮に，合計特殊出生率が１．８や２．０７となる年次が５年ずつ遅くなると，将来の定常人口が概ね３００万人程度少なくなると推計される。

２　鈴鹿市の将来人口推計

（１）パターン別の将来人口推計

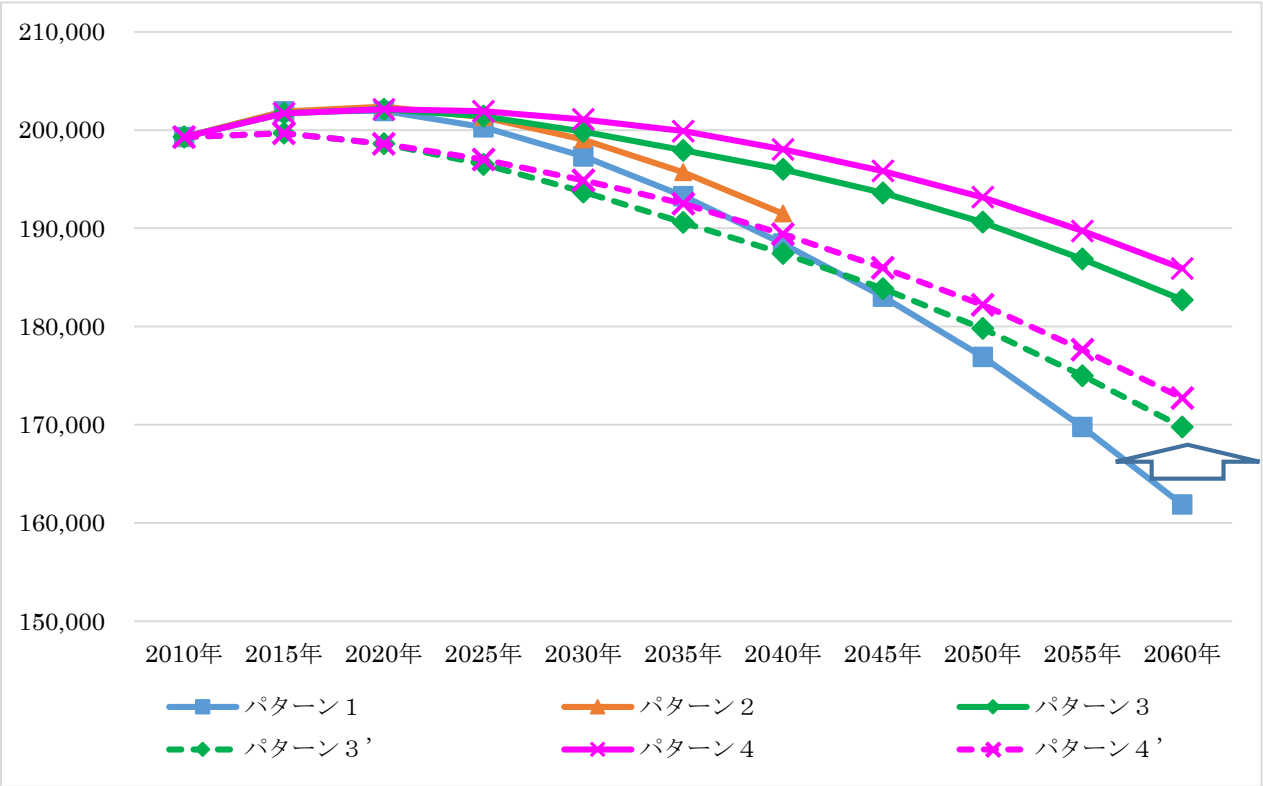
○ 鈴鹿市における２０１０年から２０６０年までの将来人口の推計について，社人研の「日本の地域別将来推計人口（平成２５年３月推計）」など国から提供されたデータとワークシートの活用等により，パターン別のシミュレーション結果は次の図表とおりです。

【図表　２－１】　　パターン別シミュレーション条件

分　類	シミュレーション条件
パターン１ 【ベース推計】	全国の移動率が，今後一定程度縮小すると仮定した推計（社人研推計準拠）
パターン２	全国の総移動数が，２０１０（平成２２）～２０１５（平成２７）年の推計値と概ね同水準でそれ以降も推移すると仮定した推計（日本創成会議推計準拠）
パターン３	パターン１をベースに「合計特殊出生率」を国が長期的な見通しで仮定値とした「２０２０（平成３２）年には１．６，２０３０（平成４２）年に１．８程度，２０４０（平成５２）年に人口置換水準（約２．１）」を適用した推計
パターン３’	パターン３をベースにし，人口移動がゼロ（転入者数＝転出者数）と仮定した推計
パターン４	パターン１をベースに「合計特殊出生率」を三重県「希望がかなうみえ　子どもスマイルプラン」の総合目標を前提に「２０２５（平成３７）年には１．８，２０３５（平成４７）年に人口置換水準（約２．１）を」適用した推計
パターン４’	パターン４をベースにし，人口移動がゼロ（転入者数＝転出者数）と仮定した推計

【図表　２－２】

鈴鹿市の将来人口のベース集計とシミュレーション結果



※【図表　２-１】パターン別シミュレーション条件から作成

【図表　２－３】

将来人口シミュレーション結果別の人口構造

		総人口	年少人口（0-14歳人口）	生産年齢人口（15-64歳人口）	老年人口（65歳以上人口）	うち75歳以上人口
2010（平成22）年	現状値	199,294	30,557	129,578	39,159	17,603
2020年（平成32）年	パターン1	201,946	27,111	123,459	51,376	25,345
	パターン2	202,371	27,126	123,760	51,485	25,384
	パターン3	202,106	27,271	123,459	51,376	25,345
	パターン3’	198,608	27,077	121,362	50,169	24,593
	パターン4	202,106	27,271	123,459	51,376	25,345
	パターン4’	198,608	27,077	121,362	50,169	24,593
2030年（平成42）年	パターン1	197,329	23,182	118,836	55,311	32,818
	パターン2	199,033	23,316	120,022	55,694	33,036
	パターン3	199,848	25,885	118,652	55,311	32,818
	パターン3’	193,698	25,296	114,871	53,531	31,529
	パターン4	201,079	27,116	118,652	55,311	32,818
	パターン4’	194,895	26,494	114,871	53,531	31,529
2040年（平成52）年	パターン1	188,446	21,726	104,254	62,467	33,339
	パターン2	191,500	22,038	106,384	63,078	33,673
	パターン3	196,011	28,159	105,385	62,467	33,339
	パターン3’	187,444	27,069	100,103	60,271	31,773
	パターン4	198,044	29,686	105,891	62,467	33,339
	パターン4’	189,408	28,544	100,593	60,271	31,773
2050年（平成62）年	パターン1	176,925	19,982	94,819	62,124	39,088
	パターン2					
	パターン3	190,630	28,916	99,590	62,124	39,088
	パターン3’	179,805	27,494	92,643	59,669	37,212
	パターン4	193,165	29,441	101,599	62,124	39,088
	パターン4’	182,199	27,998	94,533	59,669	37,212
2060年（平成72）年	パターン1	161,882	17,395	87,982	56,505	36,798
	パターン2					
	パターン3	182,718	27,328	98,886	56,505	36,798
	パターン3’	169,778	25,740	90,873	53,165	34,882
	パターン4	185,924	28,203	101,216	56,505	36,798
	パターン4’	172,723	26,562	92,996	53,165	34,882

※【図表　2-2】鈴鹿市の将来人口のベース集計とシミュレーション結果を基に作成

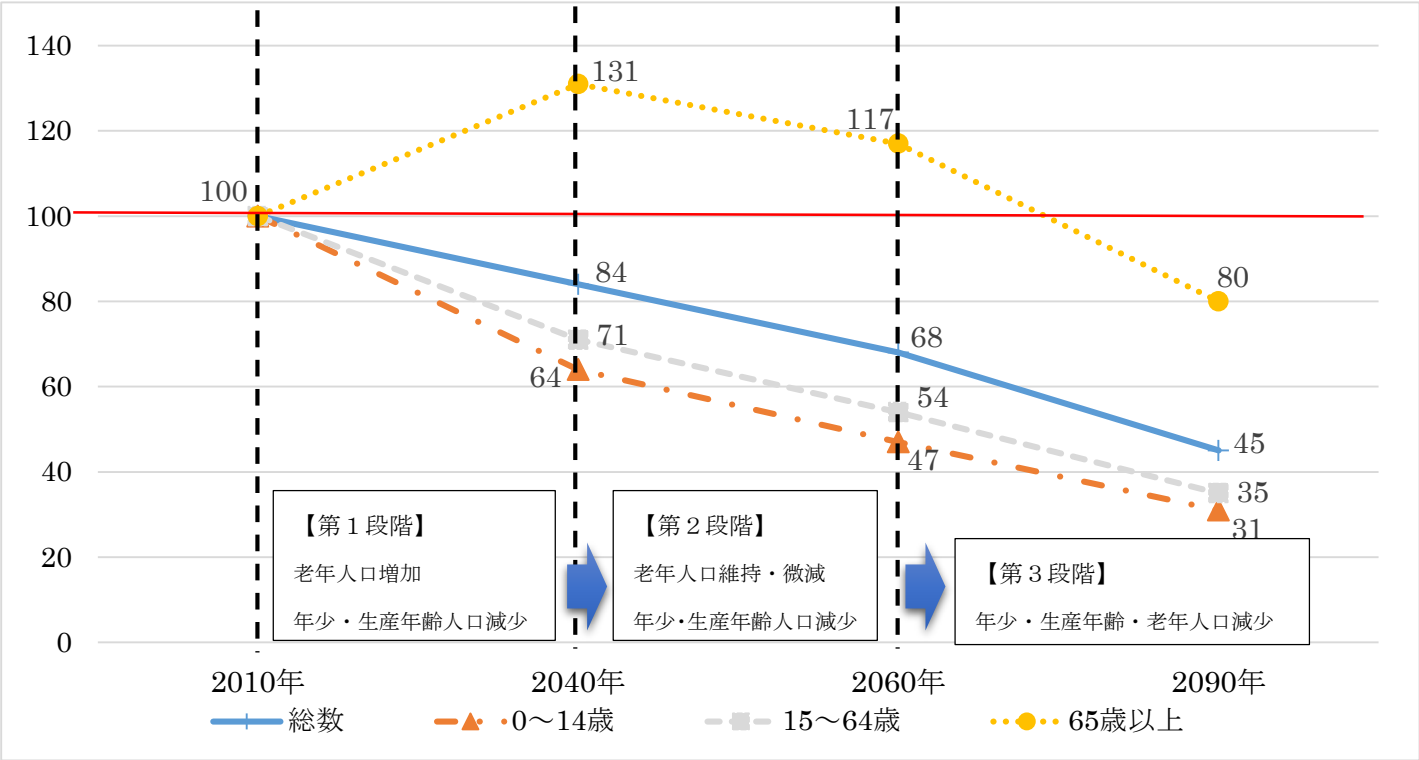
- パターン１とパターン２による２０４０年の総人口は，それぞれ約１８．８万人，約１９．２万人で，約３千人の差が生じており，パターン１では人口減少が一層進む見通しとなっている。
- パターン３とパターン４による２０６０年の総人口は，それぞれ人口移動をゼロ（転入者数＝転出者数）と仮定したパターン３’とパターン４’と比べると約１．３万人多い推計となっている。
- パターン１では，２０６０年の人口は２０１０年の人口に比べ約２０％減少する。その減少率をパターン３では約８％，パターン３’では約１５％，パターン４では約７％，パターン４’では約１３％に抑えられる。

（２）人口減少段階の分析

○ 「人口減少段階」は，一般的に，「第１段階：老年人口の増加（総人口の減少）」「第２段階：老年人口の維持・微減」「第３段階：老年人口の減少」）の３つの段階を経て進行するとされており，全国における２０１０年の人口を基準に２０４０年，２０６０年，２０９０年の人口減少段階を見たのが【図表　2-4】のグラフです。
また，三重県及び鈴鹿市における２０１０年の人口を基準に２０４０年の人口減少段階を見たのが【図表　2-5】【図表　2-6】の表です。

【図表　2－4】

人口の減少段階（全国）



※社人研「日本の将来推計人口（平成24年1月推計）」から作成
※２０１０年の人口を１００として，各年の人口を指数化している。

【図表　2－5】

人口の減少段階（三重県）

区　分	2010年（千人）	2040年（千人）	2010年を100とした場合の2040年の指数	人口減少段階
老年人口	450	542	120	1
生産年齢人口	1,151	807	70	
年少人口	253	158	62	

※２０１０年，２０４０年の３区分人口は，社人研「日本の将来推計人口」から抜粋

【図表　2－6】

人口の減少段階（鈴鹿市）

シミュレーションパターン	区　分	2010年（人）	2040年（人）	2010年を100とした場合の2040年の指数	人口減少段階
パターン1	老年人口	39,159	62,467	160	1
	生産年齢人口	129,578	104,254	80	
	年少人口	30,557	21,726	71	
パターン2	老年人口	39,159	63,078	161	1
	生産年齢人口	129,578	106,384	82	
	年少人口	30,557	22,038	72	
パターン3	老年人口	39,159	62,467	160	1
	生産年齢人口	129,578	105,385	81	
	年少人口	30,557	28,159	92	
パターン3’	老年人口	39,159	60,271	154	1
	生産年齢人口	129,578	100,103	77	
	年少人口	30,557	27,069	89	
パターン4	老年人口	39,159	62,467	160	1
	生産年齢人口	129,578	105,891	82	
	年少人口	30,557	29,686	97	
パターン4’	老年人口	39,159	60,271	154	1
	生産年齢人口	129,578	100,593	78	
	年少人口	30,557	28,544	93	

※【図表　2-3】将来人口シミュレーション結果別の人口構造から一部抜粋

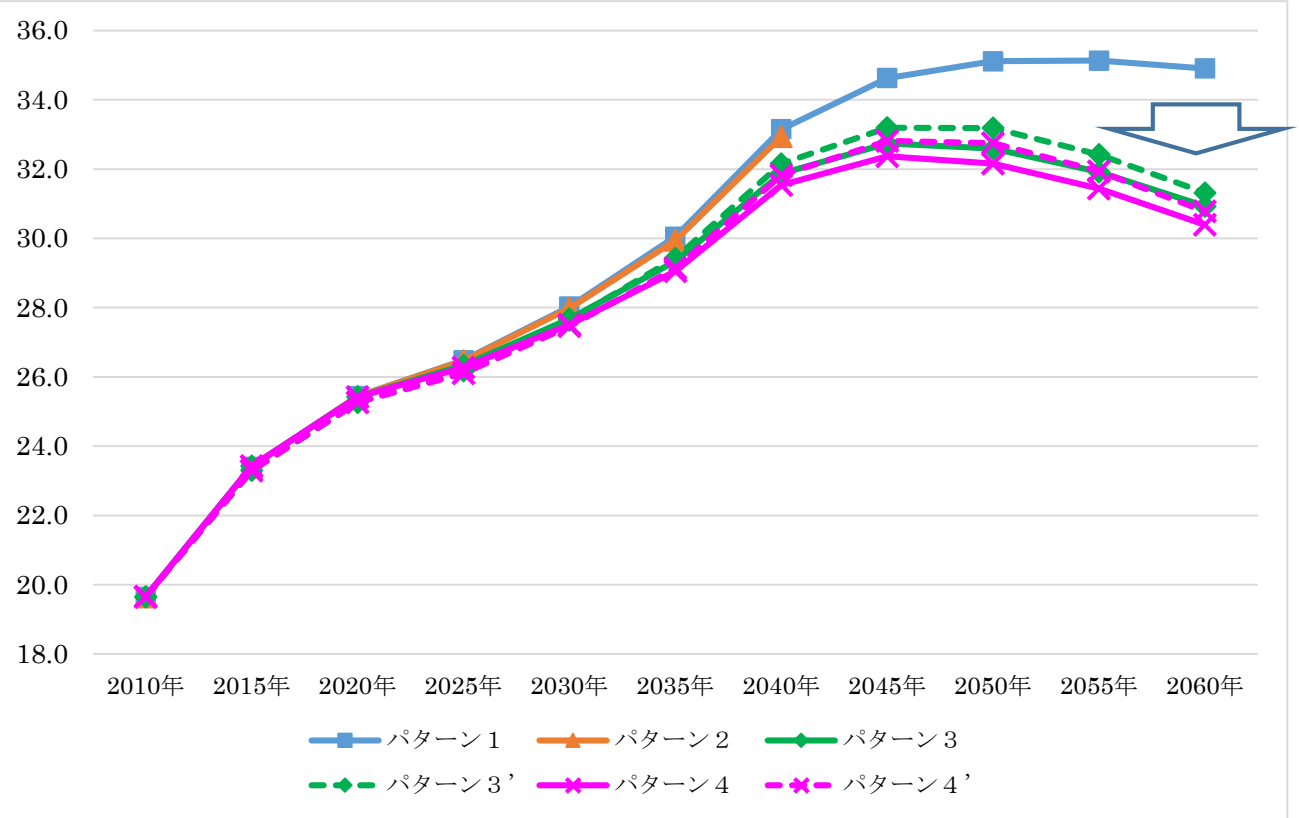
- ２０１０年の人口を基準に２０４０年の人口減少段階では，三重県及び鈴鹿市のいずれのシミュレーションパターンにおいても「第１段階」に該当している。
- 鈴鹿市においては，パターン１・パターン２では老年人口が約６割増加する一方，生産年齢人口が約２割，年少人口が約３割減少する結果となっている。
- 人口移動をゼロ（転入者数＝転出者数）と仮定したパターン３’とパターン４’では，それぞれ，パターン３とパターン４と比べると，いずれの年齢区分においても減少する結果となっており，鈴鹿市では人口移動があった場合に社会増に寄与する傾向が高い。

（3）パターン別の将来老年人口比率

○ 各パターンの２０６０年までの老年人口比率の推移を見たのが次の図表です。

【図表　２－７】

鈴鹿市の将来老年人口比率のベース集計とシミュレーション結果



※【図表　２-３】将来人口シミュレーション結果別の人口構造を基に作成

【図表　２－８】

将来人口シミュレーション結果別の人口構造と老年人口比率

		2010年	2015年	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年	2045年	2050年	2055年	2060年
パターン1	総人口	199,294	201,895	201,946	200,293	197,329	193,282	188,446	183,044	176,925	169,779	161,882
	老年人口比率(%)	19.6	23.4	25.4	26.5	28.0	30.0	33.1	34.6	35.1	35.1	34.9
パターン2	総人口	199,294	201,895	202,371	201,320	199,033	195,707	191,500				
	老年人口比率(%)	19.6	23.4	25.4	26.5	28.0	29.9	32.9				
パターン3	総人口	199,294	201,712	202,106	201,417	199,848	197,935	196,011	193,612	190,630	186,873	182,718
	老年人口比率(%)	19.6	23.4	25.4	26.3	27.7	29.3	31.9	32.7	32.6	31.9	30.9
パターン3’	総人口	199,294	199,680	198,608	196,514	193,698	190,601	187,444	183,863	179,805	174,997	169,778
	老年人口比率(%)	19.6	23.3	25.3	26.2	27.6	29.4	32.2	33.2	33.2	32.4	31.3
パターン4	総人口	199,294	201,712	202,106	201,919	201,079	199,891	198,044	195,837	193,165	189,732	185,924
	老年人口比率(%)	19.6	23.4	25.4	26.3	27.5	29.1	31.5	32.4	32.2	31.4	30.4
パターン4’	総人口	199,294	199,680	198,608	197,004	194,895	192,495	189,408	185,996	182,199	177,655	172,723
	老年人口比率(%)	19.6	23.3	25.3	26.1	27.5	29.1	31.8	32.8	32.7	31.9	30.8

※【図表　２-７】鈴鹿市の将来老年人口比率のベース集計とシミュレーション結果を基に作成

- パターン１では，老年人口比率が２０１０年には１９．６%だったものが，２０６０年には３４．９%と約１５%上昇する推計となっている。
- その上昇をパターン３では１１%，パターン３’では約１２%，パターン４では約１１%，パターン4’では約１１%に抑えられる。